

## 巻頭言

## 断層映像研究会に寄せて

増田 康治

断層映像研究会の将来に頭を巡らせていて、山の自然の成り行きを思い出した。九重山系の麓の一つに、久住登山口がある。ここは、別府と阿蘇とを結ぶ山岳交通の要所で、バスのターミナルでもある。登山者向けの宿泊施設、売店、キャンプ場などが並んでいる。辺りは自然林で囲まれ、年間を通じて人の往来ははげしい。その一角に遊歩道が作られている。火山特有の硫黄の匂いのする小川に沿って始まる小道は、木々の間を抜け、森を通り山裾の草原に終わっている。湿地帯はもちろん森の中の道は、人の離合がやっと出来る程度の、丸太でできた道である。自然の営みを出来るだけ傷つけないようにと細心の注意が払われた道である。その道の足下には、くま笹や灌木がおい茂っている。空を仰ぐと、木漏れ日がまぶしい。木々は自由に枝を伸ばしているようで、また互いに重なり合わないように、空を均等に埋め、木の葉も空に一樣に広がっている。木々の枝や木の葉も、すでに枝のおい茂っている方向には伸びず、枝のない方向の芽はすくすくと伸びている。その結果林や森の木々は自然に、特に枝落としや剪定することもなく、均等に枝を伸ばしている。競合する場合は、勢いの強い者が残り、勢いの弱い枝は自然淘汰されている。

断層映像研究会のあり方がこの数年議論的になっている。初心（と思われる点—筆者は当時いなかったのに立ち帰って考えると、この研究会は装置の製作を含めて、新しい診断技術の確立が中心であった。現在は機械技術が進み、医師が片手間に旋盤を回す時代ではない、機械工作技術者と共同して装置を開発するとしても、それに関与する医師の比重は従前に比して、極端に小さくなっていると言わざるを得ない。そのような中であって、初心に立ち帰ってこの研究会の在りかたを考えるとすれば、装置を使用しての診断技術の開発に関する研究の場といえるであろう。

役目を果たしたといえるかどうかはともかくとして、幕を閉じるのもよし、現状のままでもよし、あるいは時代の変化に応じて修正するのもよい。これに関わる人々が意味を見い出さなければ、熱意は消失し、自ずから淘汰されるであろうし、役目を果たし終わってれば、母なる川を溯上した鮭のように、自ら消滅するであろう。無理に剪定しなくても「組織」は自ずからその運命を認識しているといえるのかもしれない。関わる人がそこに意義を見出し、熱心になれば自ずから、隆盛を取り戻すであろう。

(九州大学医学部放射線科学教室 教授)